

経済学部

にしやま のりゆき

西山教行／経済学部：フランス語教育学、初級中級フランス語、国際コミュニケーション担当

<http://www.ms.econ.niigata-u.ac.jp/~jnn/>

『英語支配とは何か :
私の国際言語政策論』 一般書 ■ 津田幸男 明石書店 2,300円

近年、英語の早期学習を取り入れる小学校が見受けられるようになってきた。文部科学省は、近い将来に英語を小学校の必修科目とすることを目指して、検討を始めたようだ。多くの国々が外国語早期学習を導入している中でも、この国は初等教育段階での外国語教育を実施してこなかったのだから、その点では一歩前進にちがいない。

ところが、なぜ英語を教えるのか、なぜ英語だけを外国語として教えるのか。この問いに対してマスコミをはじめ多くの人々の問題意識は乏しく、英語の学習をあたかも自明であるかのように見なしている。なぜ、英語を教え、学ぶのか。この問いは、早期学習だけでなく、外国語教育一般に関わってくる。

著者は英語教師でありながら、英語学習・教育を批判的にとらえ、二十年ほど前から「英語支配」の現状に警鐘を鳴らしている。異なることばを使う人々が平等にコミュニケーションを交わすことに、著者は究極の目標を認めるのだが、現代世界では英語が国際語の地位を占拠しているために、英語を母語とする人々と母語としない人々の間に支配と被支配の関係が作られ、対等なコミュニケーションが実現しがたくなっているという。

確かに、日本人が外国人とコミュニケーションを行う場合に、英語の使用を当然だと無意識的に判断してしまい、そのため日本語を使用して議論を交わす場合と比べて、十分な主張を繰り広げられないことがある。国際会議などで、日本人は沈黙し、微笑を浮かべていることが多いといわれているが、このステ

レオタイプはことばの運用にハンデがあることの例証でもある。

一方、国内を見渡すと、日本人は「英語病」にかかっており、英語を話すところこそ「国際人」の条件だと思ひこみ、英語学習に過大な労力を注いでいるという。

本書は国の内外で私たちがことばといかなる関わりを持つべきか、その関係を考え直す材料にふさわしい。ただし、英語支配を乗り越える代案となると、著者の構想する「ことばのエコロジー」が現実の政策として十分な効力を持ちうるのか、なおいっそう議論の成熟を待つ必要があるようだ。

『フランサフリック： アフリカを食いものにする フランス』

ヴェルシャーヴ
大野栄士・高橋武智訳
一般書 緑風出版 3,200円

政府開発援助（ODA）といえば、日本では相手国に利益をもたらすよりも、自国を潤す代名詞としてマスコミが批判する。その実態はさておき、何もこれは日本に固有の現象ではない。かつての植民地帝国の両雄、イギリスやフランスも日本以上に ODA を金の成る木としており、本書の暴露するフランスとアフリカの間にもみられる癒着構造は政官民に広く浸透し、組織的の犯罪となっている。

本書の題名『フランサフリック』は著者の造語によるもので、フランスとアフリカの断ち切れがたい関係を表すと同時に、「金持ちのフランス」を意味する俗語的表現でもある。フランスがアフリカと癒着し、そこからフランスが金儲けをする構図が浮かび上がってくる。

「開発援助とは、金のある国の貧乏人の金を取り上げて、貧しい国の金持ちにくれてやることだ。なぜなら、貧乏な国の金持ちは、金のある国の金持ちにもらった金の大部分を返すのだから。取引を仕切っているのは結局、金のある国の金持ちだ。」(88頁)

この冗談とも本気ともつかない口上で、「金のある国」をフランスに、「貧しい国」をアフリカ諸国に読み換えるならば、誰が一番利益を上げているのかは、一目瞭然である。大統領をはじめとするフランスの大物政治家の多くは、旧植民地のフランス語圏アフリカの国家元首たちと「親密な個人的関係」を結び、彼らを庇護し、それによりすくなからぬ利益を受けてきている。

それでは、本書はフランス政界の暴露本にすぎないのだろうか。著者は最貧国の人々を飢餓から救う NGO 「シュルヴィー＝命を救うキャンペーン」の代表をつとめており、その関心は巨悪に正面から向かい、それを告発することに

より、今一度フランスに大革命以来の民主主義や人権の精神を吹き込み直そうとするところにある。

日本人には知られざるフランスの一面であるだけに、信じがたいとの思いをもたれるかもしれない。しかし、たいいていのアフリカ人にとっては周知の事実である。私たちのフランス観を再考するための好著といえよう。

よしだ としはる
吉田敏治 / 経済学部：地方財政論、地方自治

●自己紹介●

着任以来、本格学習サークル ERENet の立ち上げと運営に関わってきました。この春休みはずっとメーリングリストでのディベート、近代経済学・法学・行政学学習会そして合宿をやっていました。はまるとおもしろいですよ。おかげさまでこの3月の第5回 ERE（経済学検定）で受験申込者数全国一を達成しました。

学部では地方財政論のほか、今年度はじめて「公共経営特殊講義（行財政概説）」を開講し、また全学科目「新聞（日本経済新聞）からみる企業と社会」にも登場します。多くの学生さんと親しくなるチャンスですね。話をしてみたい人はお尋ねください。私は総務省から出向中で、任期は来年3月までです。

●学生に一言●

大学に入ったらまずは睡眠と三度の食事を確保して、サークルに入り、車学に通い、メール操作やカラオケに慣れ、告り告られ、振り振られ、孤独に親しみ。。いろいろ経験することが大事です。そして、経験に応じて読書の幅も広げてください。経験が多いただけなら若者ではあっても学生とは言えず、いまどきの大卒就職市場には参入できないことでしょう。

さて、新年度です。今回は「生き方のマニュアルになるもの」を特集します。粋のいいものを選んだところ、すべて未完結の本になりました。

『やさしい子供のつくりかた』
第1巻～

一般書

丘上あい
講談社コミックスデザート

各390～400円